

博士論文要旨

# 「地理的探究に基づく学習」を促す 地理カリキュラムの構成に関する研究

—— 米国・英国・豪州の比較を中心に ——

金 珉 辰<sup>※</sup>

Hyunjin KIM

## 1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、地理的探究に基づく学習を促す地理カリキュラムの構成を明らかにすることである。21世紀のカリキュラム研究においては、内容中心のカリキュラムから学び方を学ぶ方法を強調するカリキュラムへのパラタイム転換がなされている。地理教育においても、これまでの内容中心のカリキュラムの問題を克服し、生徒自ら学び方を学ぶことを取り入れたカリキュラムの必要性が指摘されている。そこで本研究においては、地理的思考の過程となる「地理的探究 (Geographical Inquiry or Enquiry)」を基盤とし、生徒自ら学び方を学ぶ地理カリキュラムの構成に注目する。

本研究において地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムの構成に注目する理由は、以下の2点である。

1点目としては、地理教育の目的を再確認するためである。現代社会は環境問題や国際紛争など解決すべき様々な課題を抱えており、それらを解決する能力を養うことが学校教育に要求されている。これら現代的課題には地理的側面が強く、その解決には地理的知識の習得とともに、地理的な技能の活用も必要となる。そこで、本研究では「なぜ地理を教えるか」という問いに対して、生徒が世界の各地域における様々な現象に対して地理的側面から認識すること、すなわち、生徒の地理的思考を養うことを地理教育の目的として挙げる。ここで地理的思考の過程となる「地理的探究」を基盤とする地理教育を考える必要がある。地理的知識や技能を用いて、生徒自らが地理的に思考することを目指す地理教育へ転換する

---

※社会科学教育学

ことで、「地名物産の地理」、「暗記科目としての地理」と揶揄されてきた地理教育の問題点を克服することができるのである。

2点目としては、内容と方法を結びつけた地理カリキュラムを構成するためである。1960年代に教育の現代化の影響を受け、地理教育においても地理学における成果を反映する教育内容の構成に関する議論が盛んであった。しかし、「いかに学ぶか」という学習方法とともに説明するものは少ない。これまでの地理教育における学習方法の議論は、教育学からの検討に留まっており、学習内容と直接的に結びつけることができなかった。そのため、本研究では地理的探究に基づく学習を取り入れ、地理カリキュラムにおける内容と方法を結びつけることを図る。すなわち、地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムを構成することで、生徒自らが地理的に考えることができるよう問題を解決する過程を重視する方法、その問題解決の過程において用いられる地理的概念としての知識とスキルという内容とを結びつけることが可能となる。

本研究と関連する先行研究として、「探究学習」と「地理的見方・考え方」に関するものが挙げられる。日本や韓国の社会科における探究学習に関連する研究は、1970年代に米国の新社会科における探究学習を学び、社会科学における知識体系を理解するために導入されたが、1990年代以降の研究においては学び方を学ぶ学習方法として再認識されつつある。しかし、こうした探究学習に注目する先行研究においては、内容との関連性を直接に論じることが困難である。従来の内容中心のカリキュラムにおいては、いかに教えるかという教育方法は授業段階で決められることが多かった。しかし、学び方という方法を重視するカリキュラムへ移行する中で、学び方が一つのカリキュラム要素として定着している。そのため、内容と方法はカリキュラム構成の段階から議論される必要がある。

次に、地理的見方・考え方に関連する先行研究においては、地理学における基本概念を中心としたものが主流であった。しかし、1990年代後半以降の研究においては学習のプロセスを反映するものが多く見られる。こうした研究の傾向は、地理的スキルとしての学び方を重視する国際的な流れと関連している。しかし、地理的見方・考え方は日本の地理教育の特徴を表した用語であり、国際的な傾向として扱うことが難しい。そのため、本研究では欧米において広く使用している地理的探究という用語を用いることにする。

本研究の課題として、次の4点を挙げる。1点目は、地理的探究に基づく学習

の性格を明確にし、それを促すカリキュラムの条件を導出することである。2 点目は、地理教育において先駆的な活動を行っている米国・英国・豪州における地理カリキュラムの分析を通し、3 国における地理的探究に基づく学習の展開過程を明らかにすることである。3 点目は、3 国の地理カリキュラムにおける地理的探究に基づく学習の特質と相互関連を調べることであり、4 点目は、地理的探究に基づく学習を促す地理カリキュラムの意義を明らかにすることである。

以上の研究課題を明らかにするために、本研究ではカリキュラム分析と国際比較という方法を用いる。分析対象は、1960年代以降の欧米の地理教育における代表的な探究中心カリキュラムとして、国家あるいは州のレベルで公的に制度化された「教育課程」及び「教育計画」を意味し、教育目的・内容・単元構成などで具体的枠組みを提示したものである。

## 2. 論文の構成と概要

本研究は以下のような論文の構成をとる。

### 第1章 地理的探究に基づく学習に関する理論的考察

- 第1節 地理学における潮流の変化と地理教育への影響
- 第2節 地理教育における探究学習の導入と発展
- 第3節 地理的探究に基づく学習に関する国際的ガイドラインの成立
- 第4節 地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムの構成論

### 第2章 米国における地理的探究に基づく学習の展開

- 第1節 新社会科運動と地理教育への影響
- 第2節 1980年代の地理教育復興運動と地理的探究に基づく学習
- 第3節 ナショナル・スタンダードの制定と地理的探究に基づく学習
- 第4節 1990年代以降の地理教材における地理的探究に基づく学習の強調
- 第5節 米国における地理的探究に基づく学習の特質

### 第3章 英国における地理的探究に基づく学習の展開

- 第1節 英国における地理学と地理教育の関係
- 第2節 スクールズ・カウンシルによる地理カリキュラムの開発
- 第3節 1980年代以降の地理教科書における地理的探究に基づく学習の反映
- 第4節 ナショナル・カリキュラムにおける地理的探究に基づく学習の強化
- 第5節 英国における地理的探究に基づく学習の特質

## 第4章 豪州における地理的探究に基づく学習の展開

第1節 豪州における社会科の導入と探究学習の役割

第2節 1970年代の学校基盤の中等地理カリキュラム開発

第3節 「よりよい世界のための地理教育」論と地理的探究に基づく学習

第4節 各州のカリキュラムにおける地理的探究に基づく学習

第5節 豪州における地理的探究に基づく学習の特質

## 第5章 地理的探究に基づく学習に関する世界的傾向と意義

第1節 地理的探究に基づく学習の展開における共通性と相互関連性

第3節 地理的探究に基づく学習の意義

第1章では、地理的探究に基づく学習がどのように展開されてきたかを分析するための理論的枠組を提供することを目的とした。そのため、地理学の潮流変化に伴う地理的探究の性格を確認した。また、地理教育における探究学習の導入と変化に関連して、1960～80年代の研究を中心に考察した。さらに、1992年に国際地理学連合・地理教育委員会（International Geographical Union・Commission on Geographical Education：IGU・CGE）により提唱された「地理教育国際憲章」における地理的探究に基づく学習の構造を明らかにした。これらを踏まえ、次のように地理的探究に基づく学習の性格を明確にし、それを促す地理カリキュラムの条件を導出した。地理的探究は、概念知・方法知・実践知として働きかける。地理的思考の過程において、世界を地理的概念で把握し（概念知）、習得した地理的知識を適用し（方法知）、世界の形成に参加する（実践知）ことが、地理的探究の性格である。こうした3つの地理的探究の性格は一見対立する立場として見えるが、実は相互補完的な関係である。さらに、このような性格を持つ地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムを構成するためには、内容としての「地理的概念」、方法としての「学習のプロセス」、状況としての「地理的問い」という3つの構成要素が条件として必要である。

第2章では、米国における地理的探究に基づく学習の展開を明らかにした。米国の地理的探究に基づく学習の展開における特質として、次の3点を指摘することができる。1点目は、1960年代の HSGP（High School Geography Project）における地理的探究は、地理教育においても生徒は地理学者の研究方法と同じ方法を用いることが可能であるという Bruner の発見学習に基づいていたことである。

HSGP では、地理学における知識の構造とその探究方法を中心とする地理カリキュラムを構想していた。2点目は、1984年の地理ガイドラインにおける地理的探究は、場所や地域の正確な位置を確認することができる地理的リテラシーを強調したことである。地理ガイドラインでは、既存のK-12までの社会科カリキュラムに「位置」・「場所」・「相互依存関係」・「移動」・「地域」という地理の5大テーマを適用する授業作成の枠組を提案していた。3点目は、1994年のナショナル・スタンダード地理では、地理的思考を育成するための学習方法として地理的探究に注目したことである。特に、社会的・環境の問題を学習内容として設け、その解決を探る過程として地理的探究が反映されていた。以上のことをまとめると、米国の地理カリキュラムは地理的概念の習得を重要視する地理的探究の性格を多く反映していたといえる。

第3章では、英国における地理的探究に基づく学習の展開を明らかにした。英国の地理的探究に基づく学習の展開における特質については、次の2点を指摘することができる。1点目は、地理学の研究方法としての側面が強かった1970年代までの地理的探究が、1980年代に入ってから学習方法としての地理的探究へ転換したことである。このような地理的探究の変化は、1970・80年代のスクールズ・カウンシルによって開発された地理カリキュラムにおいて確認することができた。2点目は、1990年代にナショナル・カリキュラム地理が制定され、それにより地理的探究に基づく学習の位置付けが明確となり、現在に至ったということである。英国の地理教育は地理科において行われることで地理学の最新の成果を反映しており、それゆえの地理教育学の研究によって教育方法としての地理的探究が進められてきたという特徴を表している。以上のことより英国の地理カリキュラムにおいては、地理的知識やスキルを活用する手順を重視する方法としての地理的探究が強調されていたことがわかった。

第4章では、豪州における地理的探究に基づく学習の展開を明らかにした。1970年代に豪州では、米国の新社会科の影響を受け導入された探究学習を基盤として、地理的問いを重視する地理的探究という考え方が台頭した。さらに、1980年代に入ってから、英国の地理教育の影響を受けて、行動を重視する地理的探究に基づく学習が注目されるようになった。このような豪州における地理的探究に基づく学習の展開における特質としては、探究過程の中でも価値判断・行動の段階を重視することが挙げられる。これは、豪州の地理教育が英国のように探究

の過程を重視する地理教育の維持しながら、社会との関係を重視する社会科の地理教育としての側面をも保っていることを意味する。1990年代になるとこのような傾向は地理教育にとどまらず、環境教育や持続可能な開発教育においても適用されるようになる。

第5章では、これまで考察してきた米国・英国・豪州における地理的探究に基づく学習の特質を比較し、その共通性と相互関係性を明らかにした。まず、地理的探究に基づく学習の展開における共通性としては、①3国とも網羅的な地誌学習を克服するために、探究学習を導入するようになったこと、②1980年代に3国それぞれにおいて地理的探究に基づく学習が定着し、その成果が1992年の「地理教育国際憲章」に反映されたこと、③3国とも1990年代以降地理カリキュラムを開発する際、生徒自ら学びを学ぶ方法として地理的探究に基づく学習を強調しているという3点に整理することができた。こうした3国における地理的探究に基づく学習の展開を結びつけたのは、「地理教育国際憲章」を制定し、その後も地理的探究に基づく学習を拡大させた地理教育者たちの人的な交流、そして意見交換の場としてのIGU・CGEであった。特に「地理教育国際憲章」を作成する中で培われた人的交流が、3国のそれまでの地理教育と結びつき、独自の地理的探究に基づく学習をより深化させたのである。

終章では、本研究の成果と課題を明らかにした。

本研究の成果として、次のような日本の地理教育への示唆を得ることができた。日本の地理教育では、「生きる力」とそれを支える「問題解決能力」の育成、そして「学び方を学ぶ」ことに影響を受け、地理的見方・考え方を強調している。すなわち、生徒がこれまで習得した知識・概念・技能を活用し、地理的事象を調査・探究することで調べ方や学び方を身に付けることを目指している。しかし、単に調べ方や学び方を身につけるだけでは、地理的見方・考え方を育成することはできない。地理的見方・考え方とは、位置や空間的広がりとかかわりで地理的事象を見いだしたり、それらの事象を地域という枠組みの中で考察したりする能力である。地理教育においては、探究活動を通して、世界を地理的に認識する観点や思考を養うことを目的としなければならない。ここに、地理的探究に基づく学習を促すカリキュラムを構成する必要がある。

今後の課題として、以下の2点を挙げた。

1点目は、本研究で取り上げた米国、英国、豪州以外の国の地理的探究に基づ

く学習の状況について検討することである。本研究で明らかになった成果を踏まえ、異なる社会的背景を持つ他の国の状況を確認することで、世界における地理的探究に基づく学習の共通性と相違性がより明確にでき、普遍的な地理的探究の意義を確認することができる。

2点目は、実践面から地理的探究に基づく学習について考察することである。内容中心のカリキュラムを克服し、学び方を学ぶ方法を取り入れたカリキュラムへ転換するために導入された地理的探究に基づく学習が、どのように学校現場で実践されているかを確認することが必要である。

## 参考文献

- 馬越徹 (2007), 『比較教育学－越境のレッスン』, 東京: 東信堂.
- グループ・ディダクティカ編 (2000), 『学びのためのカリキュラム論』, 東京: 勁草書房.
- Fien, J. and Gerber, R. (eds) (1988), *Teaching Geography for a Better World*, Edinburgh: Oliver and Boyd.
- Fien, J. (ed) (1989), *Classroom Activities in Development Education*, Brisbane: Alrosa Pty Ltd.
- Huckle, J. (ed) (1983), *Geographical Education: Reflection and Action*, Oxford: Oxford University Press.
- IGU・CGE (1992), *The International Charter on Geographical Education*. 中山修一(訳) (1993), 「地理教育国際憲章」, 地理科学, 48(2), pp. 104-119.
- Johnston, R. J. (1991), *Geography and geographers: Anglo — American human geography since 1945* (4<sup>th</sup>), London: Edward Arnold, 立岡裕士(訳) (1997・1999), 『現代地理学の潮流: 戦後の米・英人文地理学説史 (上・下)』, 京都: 地人書房.
- Roberts, M. (2003), *Learning through Enquiry: Making sense of geography in the key stage 3 classroom*, Sheffield: GA.
- Slater, F. (1982), *Learning through geography: An Introduction to Activity Planning*, London: Heinemann Educational Book.
- Walford, R. (ed) (1973), *New directions in geography teaching; Paper from the 1970 Charney Manor conference*, London: Longman.
- Walford, R. (ed) (1981), *Signpost for geography teaching; Paper from the Charney Manor conference 1980*, London: Longman.